

二葉亭四迷の『めぐりあひ』とロシア語原文における句読点の比較 —— 明治時代の洋語学習と《白抜き点》 ——

岡田 和子

1. 序

明治時代の洋語文法書を繙くと、30年代になってもまだ、句読点なしの漢字片仮名まじり文による説明に出会うことが少なくない。たとえば次のようなものである。

逸文ニ屈曲多ク変化煩雜ナルハ学生ノ最モ困難ナルトコロナリ而シテ之レニ熟練シテ渋滞ナキニ至ルニアラザレバ訳解ニ作文ニ隔靴搔痒ノ憾ナキニシモアラズ…¹

書中で欧文の《點記》(Satzzeichen の明治期の訳語のひとつ)²の用則を説きながら、その日本語の説明文は旧来の漢文読み下し式で句読点のひとつもないというのは、いかにも矛盾しているように思われる。しかし実際、句読点を含む日本語の新表記法は、明治30年代ではまだ暗中摸索の状態であった³。

日本におけるヨーロッパ語の句読点研究の歴史は、江戸時代の蘭語学に始まる。前野良沢は、オランダ語の《点例》、即ち句読点名を次のように訳した⁴。

- | | | |
|----------------|--------------|------------------------|
| 1. 小線・分点 (;) | 2. 半節点 (†) | 3. 重点・節点 (†) |
| 4. 問点 (?) | 5. 奇異点 (!) | 6. 夾註点・半月点 (() []) |
| 7. 合言点 (-) | 8. 分言点 (†) | 9. 省点 (†) |
| 10. 畢点 (。) | | |

以後、《皇国昔ヨリ此式ヲ闕ク》ことに気づいた蘭語学者の、江戸時代後半の一世紀半を費した研究によって、本来このような句読点を知らなかった日本語の文章表記⁵は、徐々にその影響を受け始め、明治に引き継がれていく。

按スルニ。此ハ支那ノ句読点劃ト。大抵髣髴タリ。翻業ヲ修ルノ士。先此十記ヲ領得センコトヲ要ス。苟此ニ依サル寸ハ。前後事ヲ乱シ。左右義ヲ錯ス。故ニ。余曾テ云。西書ノ諸標アルハ。猶航海ノ羅針アルガ如ク。特ニ最重ノ事ナリ。皇国昔ヨリ此式ヲ闕ク。故ニ假名ノミ書ニ至テハ。上字或ハ下ニ混シ。後字反テ前ニ属シ。此ヲ誤入各己ガ意ニ任せ。⁽⁶⁾粉々タル議論。終ニ一定シ難シ。必竟此法ヲ施サルニ因ノミ

(藤林普山『蘭学選』標式十記〔下線は筆者〕)⁶

明治になって、この句読点に新たな工夫を試みたのが二葉亭四迷である。彼は、周知の如く、明治19年に山田美妙等と言文一致運動を起し、新しい日本語の文体を模索するとともに、欧文翻訳の際、句読点にまで注意を払い、《・》と《◦》、《・》と《◦》を対応させ、更に《；/†》に対して《◦》(白抜き点)を試みた⁷。即ち、セミコロン等による半独立文の連続するロシア語の文章を、意味のみならずその構造をも訳出しようと考えたのである。

今でこそ「句読点」と呼びならわしているが、二葉亭の頃は必ずしもそうではない。当時の洋語文法書には、《句読点》の他に、先の《點記》をはじめ、《句統點》《句點》《附点法》《點書法》《附標》等、種々の名称が見出される⁸。藤林普山の《支那ノ句読点

劃)の言葉が示すとおり、「句読」とは本来漢学の用語である。これらの名称のばらつきは、漢学の伝統臭を嫌ったか、或いは漢文・欧文間の「句読」の相違を意識したからかもしれない。が、結局、伝統的名称によって現在に至っている。そもそも、なぜ近世になるまで日本語に句読点がなかったのかと言えば、その理由のひとつは、中国語にそれがなかったからであろう。日本が長い間自らの手本としてきた中国の文章は、あの恐ろしい漢字の羅列を区切るための符号を持っていない。漢文における「句読法」は、この構造の異なる中国文を日本語的に読まがために日本で考案されたものであり、従って、当然のことながら、日本語の文章表記には何ら影響を与えることがなかった。これが、日本語に〈、〉と〈。〉を導入せしめた欧文の「句読点」と、漢文の「句読法」との決定的な違いである。

上述の10種の句読点において、文の切れを表す1, 2, 3, 10の中で、日本語の論理から見て扱いの難しいのは、確かに、2の「セミコロン」と3の「コロン」であろう。この二者について、二葉亭の頃の明治期の英・独文典は、次のように説明している¹⁹⁾。

○『格賢勃斯英文典直訳』明治3年(1870)

重点、半重点及び句点、ハ文章ノ部分ノ間ニ用イラル、而シテ分チノ種々ノ等級ヲ顯ハス——重点ハ最モ大ナリ句点ハ最モ小ナリ」重点ハfirst, secondly, 等ニ因テ導カレタル格段ナルヲ算ヘ挙クノ前並ニthis, these, following, as follows ナル言ニ因テ話サレタル引文ノ前ニ置カル、半重点ハ一般ニ甚ダ短クアラザレハ組立タル文章ノ文節ノ間物体ノ名カ唯、与ヘラル、其格段ナルモノ、算ヘ与ケノ前及ビ例ヲ導ク as ト云フ言ノ前ニ置カル、… [本書自身は句読点未使用]

○『プロラン氏英吉利文典講義』後編 明治20(1887)

Semicolon (半重点) は左の二者を分別する為に用ゆべし

- 第一 単に僅かに連結せるSimple clauses (単純章句) の間を別つ為め…
- 第二 Compound (合成) 又は complex (構成) の clauses (章句) の間を別つ為め…

Colon(二重点) は左の二者を分別する為に用ゆべし

- 第一 compound sentence(合成文章) のmembers(部分即ち章句) がsemicolon に由て分かたる、時其両者の間を別つ為め…
- 第二 Quotation(引用)、examples(引例)、enumerations(挙計の語)、を別つ為め… [本書自身は句読点未使用]

○『獨逸文典』文論 明治28(1895)

das Semikolon(Semiハ「ラテン」語ニシテ「半」ノ義ナリ) 又der Strichpunkt 半重点;

専ラ文ト文トノ分界ヲ為スニ用ヒ其分界スルカハ「コンマ」ヨリモ強ク点(クワット)ノことヨリモ弱シ (カッコ内の注と下線は筆者)

- 1) Satzverbindungニハ一般ニ此符標ヲ用フ但シund, oder及ヒ二節ノ接続詞ヲ有スルSatzverbindung並ビニ短小ナルSatzverbindungヲ除ク
- 2) 回帰文ノ前半ノ各節ノ間ニ置ク

das Kolon 又 der Doppelpunkt 重点:

1) 直接援引文が本文ノ後ニ在ルトキハ援引文ノ前ニ之ヲ附ス

2) 物ヲ列挙スルトキニ之ヲ用フ日本語ノ「即チ是レナリ」「左ノ如シ」「曰ク何々曰ク何々」ニ当ル其他「即チ」ノ義ニモ用フ

3) 回帰文ノ前半ト後半トノ間ニ置ク [本書自身は句読点未使用]

これを読んで、当時の人ははたして理解できたのであろうか。全く、これより70~80年前の前野良沢の、セミコロンは《一事ノ内二節三節ニ分ルヲ有ルハコレヲ用フ》、コロンは《意義一段説畢^(一)ニ雖モ尚コレヲ詳ニ説クベキヲ有ルハニ上ノ一段ノ終ニコレヲ記ノ一節ヲナスナリ》^(二)の方がはるかに分かりやすいと思わざるを得ないような解説——特に英字典において——である。が、要は『獨逸文典』の下線部分であろう。この、文を分かつ力が《「コンマ」ヨリモ強ク点ヨリモ弱」二種類ノ終止符号を、日本語に翻訳する際いかに取り扱うべきか。この問題に対し、二葉亭は、明治21~22年に雑誌「都の花」に連載した『めぐりあひ』において、《白抜き点》というひとつの試みを提示した。しかし、後年この作品が改訳された時、この《白抜き点》は著しくその数を減じてしまう。それはなぜか。《白抜き点》は、言文一致運動においていかなる意味を持っていたのか。

日本語が新文体、新表記を持つことがいまだ出来ずにいたこの時代、翻訳は、単に翻訳であることを越えて、旧語彙からの脱却による新たな日本語の創造を意味した。本論では、以下、ツルゲーネフの『めぐりあひ』の翻訳2種（初稿、改稿）の一部をロシア語の原文と比較することにより、二葉亭四迷の翻訳の在り方を、特に句読点の扱い方に留意して具体的に考察する。そして《白抜き点》の持つ意味について検討してみようと思う。その際の手掛かりとして、当時の英・独・仏文法書における日本語の記述方法を随時参照する。洋語文典こそ、句読点に関するこの時代の主な情報源であり、同時に様々な句読表記が試みられた場所であったからである。二葉亭の《白抜き点》もこれらの試みの一環であるはずで、彼だけが、周囲から飛び抜けて句読点に関心を持っていたはずはない。

考察の対象箇所は、第一章の始め、主人公がイタリアで聞いた声を再び耳にする場面である。文章的には、原文で《;》が重層的に多用されているため《、》との対比とずれがとらえやすく、しかも訳文においては、文末の語形と句読点との組合せに数種のヴァリエーションがあり、日本語的に見て興味深い。

ここで使用する原典は以下のものである。

初稿：『都の花』第一巻第一号「めぐりあひ」第一 明治21年10月（復刻版『都の花』第一巻 不二出版 1984 所収）

改稿：『二葉亭全集』第二 池田吉太郎編 東京朝日新聞発行所 明治44

原典：Тургенев, И. С., Полное собрание сочинений и писем в двадцати восьми томах — сочинения V (1844-1854). Москва-Ленинград. 1963

2. ロシア語原文と訳文の分析

Т р и в с т р е ч и : 『めぐりあひ』より

2.1. 比較考察その①

露語) [1] Я ерешел через шпироую дорогу, осторожно пробрался сквозь запыленную

初稿) 道巾の広い往来を通り抜けて、 塵壁れなわら身を押し分け、 気を附けながら
改稿) 広い往来を横に横れて、 塵壁けのいら身の中を

крапиву и прислонился к низкому плетню. ⁽¹¹⁾ [II] Неподвижно лежал передо мною
進んで、 そして低い垣によりそった、 寂然として、 少ひさな園が
密と通って、 低い垣に寄添って見ると、 目の前に

небольшой сад. ⁽¹²⁾ весь озаренный и как бы успокоенный ⁽¹³⁾ серебристыми лучами
目前に 見えた、 限なく、 ⁽¹⁴⁾ [] 月の光に 照らされて、 さながら押積められたやうに
小さな園が [] 銀色の 月光に限なく照らされて、 まるで温つたやうになって

луны, ⁽¹⁵⁾ [] весь благовонный и влажный ⁽¹⁶⁾ разбитый по-старинному, он состоял из
一 總てえならぬ香に 凝みて、 露に ぬれて、 園は 古風な作りさまで、 細長い一區の地で
何やら佳い香が 散々として、 露にぬれてゐたが、 園の 作態は昔風で、 細長い芝生一區で

одной продолговатой поляны. Прямые дорожки сходились на самой ее середине в
出来てゐた。 [III] 真直ぐな小径が 園の中央で出逢つて
出来てゐる。 真直ぐな径が ⁽¹⁷⁾ 四方から来て、 中央で集合つて

круглую клумбу, густо заросшую астрами ⁽¹⁸⁾ ⁽¹⁹⁾ высокою липы окружали ее ровной
丸い花壇を作り、 其地には 銀葉菊が生へ成つてゐた、 それを [] 善畏樹が 高低なしに詰めかして
銀葉菊の生茂つた丸い影の裁込みとなつてゐて、 周囲は 高い 善畏樹が 並び替く 縁を

каймою. В одном только месте прерывалась эта кайма саженю на две, ⁽²⁰⁾ и сквозь
取替いてゐた。 [IV] たつた一箇所 此縁の ニ「サブゼン」計り 欠けてゐる所が有つて、 その隙間から
取つてゐる。 僅た一箇所 其縁の 二間ばかり 欠けている所があつて、 その間隙から

отверстие виднелась часть низенького дома с двумя, к удивлению моему,
低い家屋の一部分が見えたが、 ⁽²¹⁾ 不思議や、 今宵は
低い家の壁かに見透かされたが、 不思議なことも有れば有るもので、 今夜は

освещенными окнами. Молодые яблони кое-где возвышались над поляной ⁽²²⁾ ⁽²³⁾ сквозь
葱二つとも燈火がさして、 ⁽²⁴⁾ [V] 林檎の若木が 広場に 所まだらに 聳えていた
葱に二つとも燈火が射してゐる。 芝生には 奥々林檎の樹が植ゑて有つて

их жидкие ветви кротко сияло ночное небо, ⁽²⁵⁾ лился дремотный свет луны ⁽²⁶⁾ ⁽²⁷⁾ перед
そのまばらな枝を透かして 夜の空が昏やかにあをみ、 また月がうっとりとして光をもらしてゐた
その疎らな枝越しに 曇かな夜の蒼空も見えれば、 月の懐りした光も漏れて

каждой яблоней лежала на белеющей траве ее слабая пестрая тень。
林檎の木の前には その薄い影が 白む草の上を まだらに選つてゐた。
樹の横方には 其の影が 白つばい草を 薄く敷に染めてゐる。

この部分は、全体的には5文章で構成されている。そしてさらに [II] は〈一〉と〈；〉による3個の、 [III] は〈；〉による2個の、そして [V] は〈；〉による3個の半独立文より成っている。ロシア語原文と訳文の句読点の対応は、形態的には〈。〉と〈。〉、〈。〉と〈、〉、〈；／；〉と〈。〉を原則とするが、原文と初稿間では極めて正確に対応するのに対し、改稿においては〈、〉が増えて大幅に崩れてしまっている。特に〈。〉

が姿を消し、くゝ) にとって替わられているのが目につく (5)(7)(11)(12))。

	(1)	(2)	(4)	(5)	(7)	(9)	(11)(12)	
露語)	～○/～	、～	～	；～○/～；	～○/～；	～、～、～	○/～；～；～○	
初稿)	～○/～	見えた	○	あはて	○	○	あて	○
改稿)	～○/～	(+)	～	～	～	～	～	～
	[I]		[II]		[III]		[IV]	[V]

ここで注意すべきは、むしろ動詞の活用形のほうであろう。(2)では《見えた》という終止形でありながら、句読点は原文に忠実にくゝ) を用いている。逆に(5)と[III]の文末の(9)では、動詞が《ぬれて》《みて》という非終止形——以下「て止め」と呼ぶ——でありながら(○)が使われている。特に(5)の場合は、句読点が原文の(；)に対応していない。日本語の側から見た場合、文が終止する際の活用形と句読点との関係が不明確に見える。

しかし、ロシア語の側から見ると、「て止め」される理由がわかる場合がある。(5)は夜の庭園の描写であるが、そこではすべてのものが月光に《照らされて》(озаренный), 《押鎮められ》(успокоенный), 《えならぬ香に浸みて》(благоговонный), 《露にぬれて》(влажный) いる。原文では前二者には被動形動詞過去(英語等の過去分詞)、後の二者には形容詞が用いられており、これは言わば分詞構文形式の不完全な非独立文なのである。原文でこれが(2)の後に続くからこそ、邦訳においても、《見えた》という終止形をとりながらくゝ) を句読点とし、かつ「て止め」という形で分詞構文の構造をも訳出したのであろう。

だが(9)はそうではない。原文では完全な独立文である。この「て止め」については、他の例とともに後で改めて考えることとする。

なお、邦訳には若干の訳語の欠落および附加が認められる。(3)では、「銀色の」という形容詞 серебрястыя が初稿において欠落している。一方(6)では、改訳の《四方から来て》は原文にはない。二葉亭の附加である。

2.2 比較考察その②

露語)	[I]	С одной стороны сада липы смутно зеленели . . . облитые неподвижны ,
初稿)		園の一方にハ 香樹が [※] おぼろにあをみ [] ※ [音ばかりに光る志んめりとした
改稿)		園の一方には 香樹が [※] 薄青く見え [] ※ [幽々と青光に光る
бледно-ярким светом [;] с другой — они стояли все черные и непрозрачные . . . [;]		
月の光をあびて、]	今一方にハ	總て見落かされぬ程に 曇々と立列んでゐたが
月の光を受けて、]	今一方には	透かしても何も見えぬ程に 曇々と立列んでゐたが
странный, сдержанный шорох возникал по временам в их сплошной листве . . . [;] [;] они		
その新重った木の葉の中に	おりおり奇怪な、	静寂したやうな、
	折々怪しげな轟った音が、	茂合った葉の中に
		さらさらという音が起った
		さらさらと聞える所は
<u>как будто</u>	звали на пропадавшие под ними дорожки,	<u>как будто</u> манили под свою
突然 木立が	その下に匿れ込んでゐる小怪へ	人を呼ぶ やうで、
突然 木立が	其下で消えてしまふ怪の	とんと 寂寥として 木下園に
		森とした木下園へ 人を誘はまうと

では《底に明味のある》となっている。

2.3. 比較考察その③

露語) Всё дремало. ⁽¹¹⁾	Воздух, весь теплый, весь пахучий, даже не колыбался
初稿) 何も角もうつらうつらとしてゐた	空気がすべて ぬるみわたりて 寝る方なく香にしてみゐて、 前庭すらしなかつた
改稿) 四圍のものが皆で恍惚として	生暖かな、 佳い香のする空気さへ 静まり返って
が ⁽¹²⁾ он только изредка дрожал ⁽¹³⁾	как дрожит вода, возмущенная падением
ゐて ⁽¹⁴⁾ 寝をりをり	波動て ぶた 落ちた小枝にかき乱されて 水の波動る
ゐて ⁽¹⁵⁾ 寝をりをり	小枝が落ちて 漣の起つやうに ゆらゆらと
ветки. ... Какая-то жажда чувствовалась в нем ⁽¹⁶⁾	какое-то мление... Я ⁽¹⁷⁾ нагнулся
やうに ... その中に 何かかう	待ちくたびれたやうな気味が <u>有った</u> 何かうつとりとした気味が... および腰になって
する ... 何か	待焦れてゐるやうな 草臥れたやうな気味である... []
через плетень ⁽¹⁸⁾ передо мной красный полевой мак поднимал ⁽¹⁹⁾ на заглохшей траве	
垣の内を 窟いて見ると ⁽²⁰⁾ つい鼻の先に 真紅な野罌粟 [] が []	
垣の内を 覗いて見ると ⁽²¹⁾ つい鼻の頭に 真紅な野罌粟 ⁽²²⁾ の莖 が [] 草叢の中から	
⁽²³⁾ свой прямой стебелек ⁽²⁴⁾ большая круглая капля ночной росы блеснула темным:	
<u>こんもり生へ茂っていたが</u> ⁽²⁵⁾ すっと出てゐて	そのぼつと開いた花の底に 夜露の丸い大きな玉が ⁽²⁶⁾ <u>そのぼつと咲いた花の底には</u> 大粒の丸い夜露が
блеском на дне раскрытого цветка. Всё дремало, ⁽²⁷⁾	всё нежилось ⁽²⁸⁾
暗暗く光つてゐた。何も角もうつらうつらとしてゐた	何も角も 四圍のものは だりどりと
曙光に光つてゐる。何も彼も恍惚とした ⁽²⁹⁾ []	
вокруг ⁽³⁰⁾ всё как будто глядело вверх ⁽³¹⁾ вытянувшись, не шевельясь и	
錠けてゐた(割註有、不明) 何も角も 茫然 虚空を見詰つめているよう <u>有った</u>	延び上がつて、 身動きもせず、
だらけて ⁽³²⁾ [] 然然延上がつて、 身動きもせず ⁽³³⁾ 何かを待ちながら 空を見上げてゐる	
выжидая... Чего ждала эта теплая, эта не заснувшая ночь ?	
何かを待ちながら... <u>何を待ちわびてゐた</u> ⁽³⁴⁾ この暖かな この眠りもせぬ 夜は ?	
やうで ある... 此生暖かな夜に 眠りもせず 何を 待つてゐるので あらう ?	
Звуча ждала она ⁽³⁵⁾ живого голоса ждала эта чуткая тишина — но всё молчало.	
響きを 待つてゐた ⁽³⁶⁾ 生物の声を この耳敏い静かさは 待つてゐた——何も角も 皆 黙然としてゐた。	
物音を 待つてゐるのである ⁽³⁷⁾ 静まり返って 耳を落まして 生物の声のするのを 待つてゐるのである——けれどもこそとも云わない。	

さらに夜の描写が続いている。この部分の冒頭は、ツルゲネフの原文では前節からの引続きであるが、二葉亭では改行され、段落が改められている。

陶然たる夜の記述は詳細を極め、内容的にも構文的にも入り組んでいるが、まず(8)(9)で一部不完全な訳が見受けられる。(8)では、初稿において《莖》が脱落している。原文の、花の「莖」がすらりと伸びている様ではなく、「花」が群れ咲いているようにイメージされている。(9)は、初稿では из заглохшей травы (しなびた草の中から)、

改稿では *заглохшей* (しなびた) が訳出されていない。原文を一言一句抜かさず違わずに訳すことが正確な翻訳であるとするならば、あるいは誤訳とされてしまいそうなほど、句読点のひとつひとつにまでこだわった二葉亭には珍しく、この箇所、特に初稿の訳は不完全である。なお、訳語の欠落は⑤にも見られ、*напнулся* (および腰になって (原意: 身をかがめて))、及び⑬「何も角も」が改稿で消失している。

句読点に関しては、2つの特徴がある。まずひとつは、⑭の句読点なしに文中で用いられている終止形である。これは、原文にはこれに相当する句読点はあるのだが、それを無視し、しかも主客の語順を日本語風に転倒させなかったため、このような「切れ」のない文中終止になってしまったものである。ところが、後出の2.4(1)のように、原文に存在しない句読点を文中の終止形と組み合わせ用いている場合もあり、文中終止に対する句読点の使用法に若干の動揺が見られる。

もうひとつは、原文・訳文間での句読点の非対応 (②⑥⑩⑪) および動詞の終止形と《 》の組合せ (③④⑬) の頻度が高いことである。後者の「終止形+、」は既に2.1の②に一例あったが、ここの3例を合わせてみると、いかなるときに用言の終止形に対して《 》を用いているかがわかりそうである。

2.1の②: 寂然として少ひさな園が目前に *見えた*、隈なく月の光に照らされて、さながら押鎮められたやうに――

2.3の③: 唯をりをりに *波動てゐた*、落ちた小枝にかき乱されて水の波動るやうに…

④: その中に何かかう待ちくたびれたやうな気味が *有った*、何かうつとりした気味が…

⑬: 何も角も宛然虚空を見詰めているやうで *有った*、延び上がって、身動きもせず、何かを待ちながら…

これを見る限りでは、即ち、文の後ろに修飾句があり、しかもそれが、転倒なしの原文通りの語順で訳される場合に、「終止形+、」となるようである。

次に、句読点の非対応であるが、原文と初稿との対応を見てみると、次のようである。

② 《 ; 》 ⇒ 《 》 ⑥ 《 : 》 ⇒ 《 》 ⑩ 《 ; 》 ⇒ 《 》

⑪ 《 () 》 ⇒ 《 》

本来なら、先の3者は《 》、最後のものは《 》となるはずである。ところがそうっていない。これは即ち、二葉亭の訳文が、ツルゲーネフの原文とは異なった意味連関の中にあることを示唆している。例えば②の場合、この一文の全体的意趣は「空気」である。それが《 ; 》によって二分されている。原文の意味的区分は

空気) 1.ぬるい、2.芳香、3.微動だにしない; / 時折動いた、～のように…である。それが二葉亭の初稿ではこうなる。

空気はぬるく、香を放ち、微動だにしないが、時折動いた、/ ～のように…改稿になると、さらに甚だしくなり、原文の《 ; 》の持つ重層性は完全に喪失する。

ぬるい、香を放つ空気は微動だにせず、時折～のように揺れる

⑥と⑩では、この構造上の相違はさらに明確である。即ち原文は、「垣根の内側」を描写する際、

垣の内を覗く；／（内部の描写）1. 罌粟の花の茂み；2 その花に宿る夜露
という二層構造を持っているが、訳文では、

垣の内を覗くと、罌粟の茂みがあり、夜露が光っていた
となり、この一文を構成している三要素が（；）によって並列化されている。このような句読点の非対応は、前節・前々節においても現れているが、とりわけ、初稿の（；）が失われ改稿で（；）になる変化は、（；）によって保存された、散文のエッセンスであるところの或るまとまりを持った意味的重層性が、日本的に並列化されていく過程を表しているのである。

散文の句読点はなぜあるのか。それは、文章の意味連関を明確にするためである。序章で、江戸および二葉亭の時代の英・独文典におけるコロンとセミコロンの用法を挙げたが、それに拠ると、たとえば後者の役割は《一事ノ内二節三節二分カル》（前野良沢）、《文章ノ部分ノ…分チノ種々ノ等級ヲ顕ハス》（『榕賢勃斯』）、《二者を分別する》（『プロロン氏』）、《文ト文トノ分界ヲ為ス》（『獨逸文典』）ことである。要するに「文を分ける」のであるが、では、何を基準にして分けるのかという点に関しては、前野良沢はまだしも、明治期の3者は文章を目で眺めた場合の外面的なメルクマールに僅かばかり言及するだけで、はなはだ心もとない。これを『英文法辞典』（昭和52）の次の記述と比較してみると、両者の説明の相違がよくわかる。

Semicolon（セミコロン）〔；〕 コンマと終止符の中間に位する。その主な用法は、文法的には分離しているが、意味のうえでは密接な関連があるために、終止符では不適当な場合に、文中の切れ目を表わすことである。^{#11}（下線は筆者）

二葉亭の時代の文法書でこれに比して遜色なき説明が見られるのは、明治20年の『イングリッシュ文法主眼』^{#12}である。『めぐりあひ』の一年前に出版されたこの書における《句読》の説明は、先述の明治3年の『榕賢勃斯』と異なり、はなはだ明快である。

句読トハ文章ヲ切分クル符号ニシテ語句ノ関係ヲ明ニシ随テ意義ヲ確實ニシ兼テ朗読ノ際切ノ長短音声ノ抑揚ヲ示スモノナリ（下線は筆者）
ただし、この本自身は句読点を全く用いておらず、8種の句読符号にも訳語は一切付されていない。

また、同じく明治20年出版の『ソンメル氏佛文典獨学』^{#13}においても、《句点ノ記号》は

句点ハ章句ノ意味ニ依テ或ハ呼吸ノ必要ニ依テ請求サレタル休止ヲ書方ニ於テ指示スルノ術デアール、（下線は筆者）

と定義され、句読点使用の基準が《章句ノ意味ニ依》ることを明確に指摘している^{#14}。そしてle pointを《段落点》、le point et virguleを《半段落点》、les deux pointsを《重点》と訳しているが、殊に《半段落点》の訳語は、秀逸であると思う。既出の英・獨文典がいずれも《半重点》という形態面からの直訳的命名であるのに対し、《半段落点》はその意味の本質をよくとらえた表現だからである。《段落点》にしても、仏語の原語が「点」であるのに、そう訳していない。Punktをまさに《点》と直訳した『獨逸文典』のそっけなさど好対照である。これはもう訳者の意識の持ち方の相違であるとしか言ひ様が

ないであろう。仏文典のこの態度は、同時期のものよりむしろ、〈半節点〉〈畢点〉と訳した、これより70～80年前の前野良沢のそれと相通ずるものがある。

しかもこのフランス語の文法書は、興味深いことに『イングリッシ文法主眼』等と違って、本文中の説明において自身でも句読点を用いている。「凡例」の第4項には次のように言われている。

一 句点は概子原文を存ス、重点：ハ即チ下ノ如シノ意義アル者読者焉ニ留意セヨ

本書中で使われた符号は句点としての〈・〉だけであり、重点は、このようにその意味用法は的確に理解されたとはいえ、その外的形態は原書のままである。しかしここには、〈白抜き点〉こそないが、欧文の句読点を原文通りに日本語に移そうという、二葉亭と共通する態度が見出されるのである。

同時期の文典でこれと同様の姿勢を持つのが、たとえば明治19年の『挿訳注釈シェーフェル氏獨逸文典』（前・後編）²¹⁵である。前編では文末に時々〈・〉を附すだけだったものが、後編では独文の句読記号〈・／・／：／；／，”“〉をそのまま使用している。ただしブントは、文末ではなく、段落の最後にものみ用いられることが多い。よって段落中では、各文末に何の句読点も打たれないままである。注目すべきことに、ここでは段落による意味のまとまりが考慮されているのである。だがしかし、段落末でも句点がない場合もままあり、また段落中でも文末に〈・〉のある例も散見され、句読点用法の動揺が現れている。一方、明治17年の『スウキントン氏英語学新式直訳』²¹⁶では、欧文方式を採らず、現在と同じ〈・／・〉を用いている。ところが『シェーフェル氏』とは逆に、段落中の各文の終わりには〈・〉を打つが、段落末には打っていない。この他にも、上述の『ソメル氏』のように〈・〉のみを句読点としたものとは逆に、〈・〉しか用いていないもの、或いは現代とは逆に、〈・〉を読点、〈・〉を句点として使用したもの等、この時代には実にさまざまな句読点の試みがなされているのである²¹⁷。

これらの洋語文典をみると、直輸入方式であれ、日本の工夫方式であれ、当時の日本語の新表記法が、ヨーロッパ語の要素を摂取しながら、思考錯誤を繰り返しつつ考案されていく様子がよくわかる。このような、国別を問わぬ地道で誠実な洋語学的研鑽に支えられて、明治の華やかな文学運動は展開された。このような動きのなかで、二葉亭の〈・〉もまた考案され、日本語に導入されたのである。そしてこの句読点は、単なる外的指標にはとどまらない、ヨーロッパ的思考の根幹を成す「意味的重層性」、突き詰めれば、日本人が現在でも不得手とする「段落」に対する理解と認識に至るものを内包している。二葉亭の〈白抜き点〉は、この「意味的重層性」を並列的な日本語表記の中で実践しようとする試みであった。

2.4 比較考察その④

露語) Это они, я узнал их, это те звуки: ... Вот как это было. Я возвращался
初稿) 是れだ、是れに違ひない、此声だ … どうしてかといふと かうで。自分は 家路を指して
改稿) あれだあれだ、あれに違ひない … 如何してかと言へば、まづかうである。或時

домой после долгой прогулки на берегу моря. Я быстро шел по улице уже
 歸った¹⁰ 海辺で暫く 散歩してから 足疾やに 荷を通った
 海辺で 久らく散歩してから、 宿へ帰ろうといふので 荷を 急ぎに運んで来たことが 有った

давно настала ночь, — великодушная ночь, южная, не тихая и грустно задумчивая
 夜にはもう 先刻 入ったの² 壯麗な 夜に、 南国の露西亞のやうに 静かで、 物哀れに 鬱陶しい
 其時は日が暮れてから最う余程経つてゐたが、 南国のことであるから、 華やかなもので、 露西亞の夜のやうに 寂然として意しくなるのとは

как у нас, нет! вся светлая, роскошная и прекрасная, как
 のではない どうして? [※] すべて (11) 気味の佳い、きらびやかな、うつくしい
 譯が違ふ なかなかそんなものではない! [※] 鮮やかで、 奇麗びやかで、 美しいものだ

счастливая женщина в цвете лет. луна светила невероятно ярко. большие
 [※ 仕合せな 妙合の 婦人のやうに、] 月は 怪しまれるほどに 白々と 照りわたつてゐた あざやかな
 [※ 人で云つたら、 若い果敢な女といふところで、] 月は おそろしく 白あかで 煌々する

лучистые звезды так и шевелились на темно-синем небе. резко отделились.
 大粒な星は 黒ずむだ蒼空に きらつき切つてゐた 黒々とした物の影は
 大粒な星が 青黒い空に 物々と離れて 黄ばむ程

черные тени от освещенной до желтизны земли.
 黄ばむまでに照らされた地面に 劇然 際立って見えた。
 月に照らされた地面に 物の影が 黒々と 際立って見える。

前節から少し飛んで、主人公がかつてイタリアで聞いた声を再び耳にする場面である。これまでの庭園の描写も精緻だったが、〈 〉と〈 ; 〉を幾重にも重ねてここに書き出された夜の華麗さは、まさに圧巻である。

句読点に関しては、初稿では(2)を除き、〈 ; 〉に〈 〉が、〈 〉に〈 ; 〉がきれいに対応し、原文のリズムと構造を保っているが、改稿では、これまでと同様にそれがすっかり崩れてしまっている。

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	
露語) ~	(ナシ) ~	~ ; ~	~ , ~	~ ; ~	~ ; ~	~ ; ~	~ ; ~	~ 。 ◁ 対応箇所
初稿) ~	歸つた	~ ; ~	~ ので ~	~ ; ~	~ ; ~	~ ; ~	~ ; ~	~ 。
改稿) ~	~ ; ~	~ ; ~	~ ; ~	~ ; ~	~ ; ~	~ ; ~	~ ; ~	~ 。

ここでも(1)で「終止形 + ；」が見られるが、これは、原文では切れ目のない一文を、訳において〈 〉で区切り、後半の《海辺で暫く散歩してから》という副詞句を切り離したものである(よって、原文には相当する句読点がない)。やはり、前節 2.3 で考察した通り、終止形の後ろに修飾句が続くときに、この組合せが用いられているようである。

だが、この箇所では、句読点よりも訳文のほうがむしろ問題である。細かいことから述べていくと、まず(4)の文末は「て止め」の一種である。が、原文は修飾句ではなく、〈 ; 〉による半独立文である。(9)では訳順が原文と逆になっており、後ろの [] の方が訳文では先行している。このような日本語の語順に従った訳順は、2.2の(1)に一例あったが、

原文の語順を尊重する初稿においては珍しいものである。一方、これとは逆に、(11)では原文の順に忠実に訳されている。ところが、そのためにかえって《気味の佳い、きらびやかな、うつくしい》ものは何なのか不明瞭になってしまっている。

いったい、この(11)を含む(3)以降の部分は、《足疾やに街を通った》から最後まで長いひとつの文章であるが、初稿の該当箇所は訳は解りにくく、問題が多い。まず、原文を直訳してみると、次のようになる。

Я быстро шел по улице, ; уже давно настала а ночь, — великолепная ночь,
 私はすばやく街を歩いた。 すでにかなり前から 夜が 始まっていた。 (その夜とは即ち) 壮麗な 夜 (が)、
 южная, не тихая и грустно задумчивая, как у нас, нет! вся светлая,
 南国の(夜が)、静かでない(夜が)、 そしてわが国のように悲しくも憂鬱ではない(夜が)。 違うのだ。 何もかもが明るい、
 роскошная и прекрасная, как счастливая женщина в цвете лет ; луна светла
 豪華な、 実に美しい(夜)なのだ。 ちょうど花の盛り和幸福な娘のような。 月は異常なほどきらきら
 невероятно ярко. ; большие лучистые звезды так и шевелились на темно-синем небе;
 輝いていた。 より大きくきらめく 星々は、深い藍色の空に揺えわたっていた。
 резко отделились черные тени от освещенной до желтнзны земли.

黒い影が、黄色く染まるまでに照らし出された地面から、儼く自分を分かつていた。

この部分の初稿訳で特に問題なのは、次の箇所である。

— 壮麗な夜に、^(a) 南国の露西亞のやうに ^(b) 静かで、物哀れに鬱陶敷しいのでは
ない、^(c) どうして? 仕合せな妙令の婦人のやうに、総て ^(d) 気味の佳い、きらび
やかな、うつくしい。月は怪しまれるほどに皎々と照りわたってゐた。…

順位が前後するが、まず (b) (d) について述べると、(11)で既に言及した通り、原文の語順に非常に忠実なこの訳では、一体何が《静かで、物哀れで鬱陶敷しくない》のか、何の何を《気味の佳い、きらびやかな、うつくしい》と言っているのか解らない。原文を見ると、これは *ночь* (夜) のことだとすぐ解る。— *ая* は女性・単数・主格を示す形容詞の格語尾なので、*великолепная ая ночь* (荘嚴な夜) の後の形容詞はすべて、*ночь* が省かれていても、この語尾から *ночь* を修飾していることが解るのである。特に後者の《仕合せな妙令の…》以下の修飾句は、このまま初稿を読むと「月」を形容していると思いかねない。この修飾句が関係代名詞等で接続されていることを (b) で示して、《気味の佳い、きらびやかな、うつくしい》ものは月であるかのように見えるのである。しかし原文では、(b) の箇所は (c) ; であり、文章は一度ここで区切られている。(c) の前は *ночь* (夜) の、後は *луна* (月) のことが述べられており、従って《気味の佳い、きらびやかな、うつくしい》ものが夜であることは明らかである。訳順から句読点に至るまで、原文に忠実な余り起こった日本語の混乱である。

次に (a) であるが、この訳では (b) の方に《南国の露西亞のやうに》が係っている。《露西亞のやうに》— これは恐らく *как у нас* の訳であろう— はこれで正しいが、*южная* 「南国の」の修飾関係は、このままでは明らかに間違いである。露西亞は「南国」ではない。これは「壮麗な夜、南国の夜」なのであって、「南国の露西亞」ではない。*южная* の後のコンマが無視されてしまっている。「南国の夜」とは即ち、《

露西亜のやうに静かで物哀れに鬱陶敷いのではない夜である。角川書店版『二葉亭四迷全集』（昭和46）365ページの安井亮平氏の注釈では、「「南国の」のあとに句読点が省略されている。誤植か。」とあるが、或いはそうかも知れない。誤植で句読点がなくなってしまったと思われる例は23の(12)にあり、そこでは、非常に長い割注が挿入されたため、句読点が脱落・不明になってしまっている。が、しかし、以上の初稿における解りにくさは、改稿では正確に改められている。「南国の露西亜」は《南国のことであるから》と《露西亜の夜のやうに》に正しく離され、《寂然として…》以下がロシアの夜の形容だとわかるようになっていいる。

また(c)の《нет》に対する《どうして?》という訳語も解りにくい。再び安井氏の注釈に依れば、これは「原語(нет!)の直訳」であるという。だとすれば、この否定辞は「南国の夜はロシアのそれのように陰鬱なものではない。それはいったいどうしてなのだろう? (とにかく華やかな夜なのだ)」という意味合いであろうか。改稿では、この訝しさよりも否定の意の方を強く出して訂正がなされている。

更に、この直後に《あざやかな大粒な星は黒ずむだ蒼空にきらつき切つてゐた》という文が続いている。この《あざやかな大粒の星》というのは、すぐ前に月の描写があるので、月の比喩かとも思えるが、原文に複数形でзвезды(星々)とあるので、本物の星のことだと判明する。ツルゲーネフのこの時の夏の夜空は、月が強い輝きを放ち、星々がこぼれんばかりの、美しく華麗な、まさに降るような満天の星空だったのである。

2.5. 比較考察その⑤

露語) Полоски света в одном окне исчезли. ... кто-то изнутри подошел и прислонился.
 初稿) ① 片々の窓に見えた 燈火の條が消えた… 誰だか 内から歩き寄つて 窓へ 身を
 改稿) 片々の窓を隔れる 火影が 消える… 誰やら 窓の所へ来て 身を寄せた
 к нему. Я сделал два шага назад. ② Вдруг жалюзи стукнуло и распахнулось ③
 寄せた。自分は 二足 膝へ退却つた ④ 不意に すかし戸がごとりといつて やつと開いた ⑤
 らしい。 思はず 二足ばかり 後へ退却ると ⑥ 不意に すかし戸がごとりといつて、 ぱつと開いて ⑦
 стройная женщина вся в белом, быстро выставила из окна свою прелестную голову и ,
 白衣を着た 儂な姿の婦人が 美しい首を 窓から つつと出して、
 白い着物を着た 儂な姿の女が 美しい顔を ⑧ [] 簷と出て、
 протянув ко мне руки, проговорила : (Sei tu?) Я потерялся, ⑨ не знал, что
 自分の方へ 手を延ばして、 “Sei tu?” と云つた。 自分は正然と失つてしまつた ⑩ 何と云つて言いか
 ⑪ [] 手を延ばしながら、 “Sei tu?” といふ。 何と答えて好いか判らぬので ⑫ 儂眼
 сказать ⑬ но в то же мгновение незнакомка с легким криком откинулась назад ,
 解らなかつた ⑭ が 見知らぬ 婦人も また同時に おやと 忍びながらに叫んで、 身を後方へ引いたかと思ふと、
 してゐる中に ⑮ [] 女も ⑯ [] おやつと 云つて、 身を後方へ引いたかと思ふと、
 жалюзи захлопнулись, и огонь в Павлинье еще более померк ⑰ как будто:
 すかし戸が ぱつたり閉つて 簾帳の中が 一層 暗くなつた ⑱ とんと 燈火を
 透戸は ぱつたり閉つて 簾帳の中が 一層 暗くなつた ⑲ 大方 燈火を

вынесенный в другую комнату .

次の間へでも 持出したやうに .

次の間へ 持出したものであろう .

(2)と(3)の、原文及びそれに忠実な初稿では、原則通り〈・〉が〈○〉、〈;〉が〈◦〉となつて文が終止しているが、改稿ではそれが〈◦〉に替わつて後続文と一続きになっている句読点对應は、前節までの例と同様である。だがその一方で、この2.5の箇所では、それとは逆の現象が起つている。即ち⑩において、初稿の〈◦〉を改稿で〈◦〉に変えて半独立文としているのである。

初稿) 観楼の中が一層暗くなつた。とんと燈火を次の間へでも持出したやうに。

改稿) 観楼の中が一層暗くなつた。大方燈火を次の間へ持出したものであろう。

両者を比べれば、〈◦〉が〈◦〉に替つた理由は明らかである。「終止形+◦」(原文も同じ構造)の後ろに従っている修飾句を、改稿で半独立文としたからである。二葉亭は、ロシア語から日本語へ、ただ単に忠実に句読点を移し取つただけではなかつた。原文および初稿の「終止形+◦」を改稿で〈◦〉に変えたこの2.5⑩、これとは逆に、句読点なしの露文を修飾句を伴つた「終止形+◦」にした前節2.4(1)が示す通り、二葉亭は、小さくとも西欧の論理性を体現する句読点という符標の意味を十分に認識し、それを、明治前半期のいまだ混沌たる日本語において実践したのである。

なお最後に、ここでも改稿において消失した語句が若干あるので、それを付記しておく。

(4) из окна 窓から (5) ко мне 自分の方へ

(8) незнакомка 見知らぬ女(「見知らぬ」の部分が改稿で消失)

(9) в то же мгновение この同じ瞬間に

3. 検討

以上で、『めぐりあひ』の一部を材料とした、二葉亭四迷の翻訳とロシア語原文との比較考察は終わった。「星が夜空に〈きらつき切つてゐた〉」(2.4の(8))のような新奇な表現を用い、かつまた、『余が翻訳の標準』に述べられているように、「語数も原文と同じくし、形をも崩すことなく、偏へに原文の音調を移すのを目的として、形の上で大変苦勞し」²¹⁾た二葉亭の訳調については、既に様々に論じられているので、ここでは触れない。以下、論点を《白抜き点》に絞るが、ただ「て止め」についてはここで一考しておきたい。つまり、「て止め」の条件は何か、ということである。

初稿で多用されているこの印象的な用言止めは、改稿ではほとんど消滅してしまうが、一体原文の何が「て止め」されているのであろうか。訳文だけ見ると、分詞構文等の、いわゆる主語と定動詞²¹⁾が揃っていない不完全な挿入句かと思つてしまうが、実は必ずしもそうではない。

a) 2.1から「月の光に照らされて、…総てえならぬ香に寝みて、露にぬれて。」⇒被動形動詞過去(英語等の過去分詞)並びに形容詞。

b) 同じく2.1から「不思議や今宵は窓二つとも燈火が射してゐて。」⇒完全な一文

を独立させたもの。

- c) 2.2から「宛然木立がその下へ匿れ込んでいる小徑へ人を呼ぶやうで、とんと寂寥として木下闇へ招ぐやうで。」⇒;の後に続く完全な一文。
- d) 同じく2.2から「をりをり月に着ひかかちて、」⇒不完了体副動詞（英語等の現在分詞）による挿入句。
- e) 2.3から「空気はすべてぬるみわたちて、残る方なく香にしみるて、」⇒形容詞の同格並置。
- f) 2.5から「白衣を着た仇な姿の婦人が美しい首をつッと出して、自分の方へ手をのばして、…。…また同時に忍びながら叫んで、…すかし戸がぱったり閉って…」⇒文の単純並置。

このうちf)は、現代でもごく普通に行われる文章の並列接続法であり、特に「て止め」と断わる必要もないようなものである。a)、d)、e)は、最初の予想通り、挿入・付加された分詞および形容詞（句）であり、c)はкак будто（まるで～のように）の訳出である。しかしb)はそうではない。これは主語と定動詞を備えた立派な独立文である（この点はc)も同様である）。それなのに、「て止め」と、しかも読点ではなく句点を用いて、文を終止させている。この露文を直訳すると、次のようになる。

и сквозь отверстие виднелась часть низенького дома с двумя, к удивлению моему,
そして 隙間を通して 低い家の一部が ふたつの、そして私が驚いたことには、
освещенными окнами.
燈火のともされた窓から見えた。

2.1では考察を保留してしましたが、この《不思議や…燈火が射してゐて》という「て止め」は、或いは、言文一致体においては最早使えない係り結びの代用なのではあるまいか。そして、これによって「私の驚き」を強調したのではないだろうか。

ところで、独立文の「て止め」の例は他にもあり、今回は取り上げなかったが、2.1の少し前に次のような箇所がある。

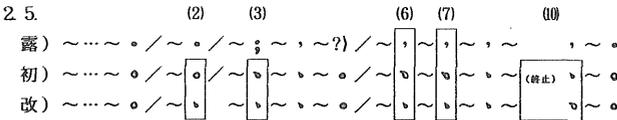
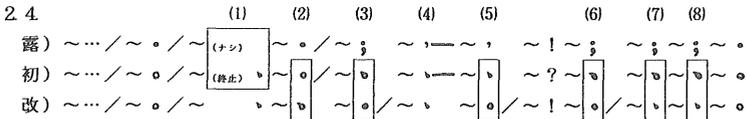
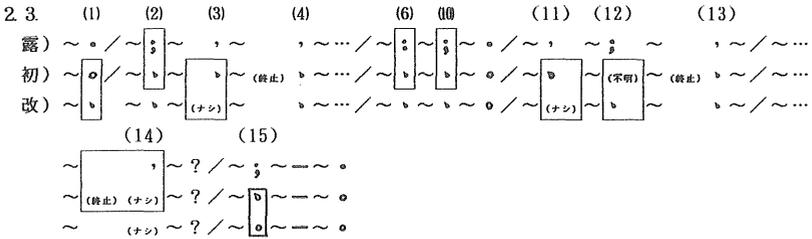
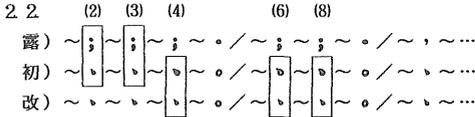
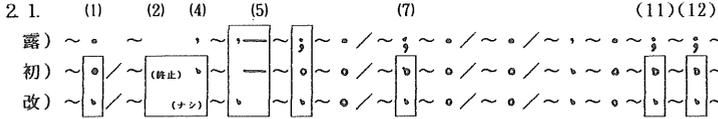
Старика этого звали Лукьянцем.

初稿)この老人の名を「ルキヤヌイチ」といふので。改稿)此老人はルキヤヌイチといったので。

これなど、前後関係を見ても何故「ので」が必要なのか不明である。しかも、改稿にもそのまま引き継がれている。旧文体なら「この老人、名をルキヤヌイチとぞ言ひける」とでもするところであろう。いずれにせよ、いかなる場合に「て止め」されているのか、原文の側から見るかぎりには、明確な原則は見出だされないようである。ただ、ひとつ意外なのは、関係代名詞の例がないことである。上の「ルキヤヌイチ」の近くに関係代名詞の使用例が2つあるが、いずれも「て止め」はおろか〈〉すら用いられていない。

さて、問題の句読点についてであるが、ふたたび『余が翻訳の標準』から引用すると、二葉亭は「コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが二つといふ風にして、原文の調子を移さうとした」²¹⁸のだが、必ずしも〈、〉と〈、〉、〈；/；〉と〈、〉、〈。〉と〈。〉という対応が完全に成り立つわけではないことは、既に見た通りである。それでも初稿ではかなりきれいに対応するが、改稿になると〈。〉

に変わって《い》が多くなり、対応の度合は大分低下してしまっている。即ち、半独立文が減少して意味の重層構造が失われ、代わりに文章が《い》によって接続され、並列的に長文化しているのである。ここで、2.1.等で試みた様な句読点の対比を、今回分析の対象とした部分全体について行ってみると、以下ようになる。表中の《／》は一文の終わりを、《(終止)》は動詞の終止形と読点の共用を、そして四角の囲みは各稿間での句読点の非対応箇所を示している。



《白抜き点》の使用が初稿では15例あるのに対し、改稿ではその僅か7分の1弱の2例になっている(2.4の(2)、2.5の(10))。そのうち初稿のものが改稿にまで引き継がれたの

はひとつもなく、この2例は、改稿で新たに増えた《白抜き点》の、ごく少ない例である。初稿の15例は、改稿において、すべて、姿を消した（○⇒◦：11例、◦⇒○：3例、◦⇒（ナシ）：1例）。意味のみならず文の構造をも日本語に訳出しようとした二葉亭の試みは、改稿の段階で著しく挫折してしまったのである。

《白抜き点》は、結局、欧文あってこそ存在理由のある句読点なのである。この『めぐりあひ』において、ひとつの文が完結する場合のパターンは4種ある。

- 1) 終止形+◦
- 2) 終止形+◦
- 3) 終止形+◦（厳密には、これは文末の終止には用いられない）
- 4) 終止形+句読点なし（同上）

これを使い分けるには、日本語の立場から考えれば、いかなるときに終止形と（◦）を、あるいは（◦）または（い）を組み合わせるか、そのルールを決めなければならないが、それは極めて困難であろう。3) に関しては、二葉亭では「終止形が修飾句を従えている場合」というはっきりした条件が見出された。が、1)と2)に関しては、2.5.00のような例があるとは言え、両者の使い分けの基準は、基本的にはやはり、ロシア語の原文でどちらが用いられているか、にあるように思われるのである²²⁰。3)の場合にしても、2.3.(14)のごく希にはあるが4)になる例があり、文末の「切れ」の形式に確固たる原則がなく、日本語の側から見ると、統一性を欠いてしまっている。

2.3.で述べたように、〈◦〉と〈◦〉、即ち〈◦〉と〈；／：〉の区切れの本質は、各文章間の意味的連関にある。欧文では、意味的に関係を持つ〈；〉や〈：〉が重層的にくっつか集まって、ピリオドでまとめられる一文を構成し、さらにこのような文章がまとまって、段落というひとつの意味のまとまりを作っている。ところが日本語は、先に見たように、文章の構成要素を並列化して叙述するために本来段落を持たず、文の接続は「切れる」か「続く」かのふたつしかない。「切れる」場合の本来の活用形である「終止形」に数種の句読点が付く、即ち、意味連関の重層性に基く符号によって文の切れ方が数種に分かれるというのは、「本質的な構造において（中略）句読法の実現を必要としな」²²¹ い日本語文には馴染まないのである。特に分離と結合の中間の性質を持つ《白抜き点》は、意味のまとまりを考慮した、文としては切れるが意味的には繋がっている「段落」というものによって構成される欧文を移すからこそ、必要とされる類のものである。二葉亭も、日本語におけるその不適切さを強く認識したからこそ、構造をも訳すというポリシーを曲げて、改稿での《白抜き点》の使用を著しく減せしめたのではなからうか。

4. 結び——《白抜き点》の持つ意味

『めぐりあひ』において二葉亭によって試みられた《白抜き点》は、中途半端な文の「切れ」を必要としない日本語においては、結局定着しなかった。それではこれは、無意味なものだったのであろうか。空しい試みだったのであろうか。

《白抜き点》は、その性質上、欧文への深い理解なしには考えつかない類のものである。二葉亭がこれをわざわざ用いたのも、単に外面を真似したかったからだけではあるまい。

《白抜き点》なしには西洋語の本質は移せないと考えたからこそ行った試みであろう。しかし、外国語の本質など、一朝一夕に理解できるものではない。このような深い認識はどこから来たのか。

始めに述べたように、句読点は、江戸時代の蘭語学——とりわけ『解体新書』の訳者のひとりである前野良沢がひとつの出発点と考えられるものである。句読点を知らなかった日本語にそれを持ちこみ、実践し始めたのは、彼ら蘭学者であった。序章でその一部を引用した藤林普山の記述は、1810年当時の、読点として用いられた《・》の例である。江戸時代のオランダ語研究については、杉本つとむ氏の『江戸時代蘭語学の成立とその展開』（Ⅰ～Ⅴ巻）に詳しいが、その中で杉本氏は次のように述べられている。

…しかしまた、前野良沢以来の〈点例〉の理解が、明治までほとんど変質せずにつづけられていることも充分認識しておかねばなるまい。こうした約1世紀にわたる記号への理解と認識こそ、ヨーロッパ的文章、思想を摂取しようとする蘭学者や洋学者の努力でもあった。一つ一つの記号への十分な認識なしには、とうてい正しい解釈も、また正確なヨーロッパ文化・学問の把握、消化も可能ではなかったと思うのである。やがておとずれる明治の新しい文学と、そこで実践された文章表記とこれら記号の問題も、以上のような史的重みの中から、生まれ出てきた新しい息吹きと解することができるのである²²。

二葉亭の、《；》と《：》に対する《々》（白抜き点）の工夫も、孤立的に突然現れたものではなく、江戸時代に培われた、歐文理解に対するこのような充分な前史があったからこそ生じたものではないだろうか。再び杉本氏によれば、江戸時代にオランダ語を文法的に研究する本格的な「蘭語学」が興隆したのは文化・文政の頃、意外なことに、1774年の『解体新書』の翻訳成って30年近くを経た後のことである。そして、その鼻祖である長崎の蘭通詞・中野柳圃（志筑忠雄）が和漢の学に秀でていたため²³、蘭語学はその最初から日・漢・蘭三か国語の比較の要素を大きく持ち、

和蘭国ハ支那ノ邦俗ト違ヒ物ヲ毎ニ理ヲ窮メ聖知ノ国ナレハ其国ノ文字属文ノ機モ符ヲ合スルニ均シニ説雜出ノ患ナク雅語俗語ノ別ナク談笑ノ間ニモ文章ニ叶フ…

（吉雄権之助『和蘭属文錦囊抄』序）²⁴

という意識を育んだ。「ここには素朴ながら、やがて明治になって、新しい外国の文学理論ともおこる〈言文一致運動〉の精神的源流があるといっても、言いすぎではあるまい」²⁵。このような認識が江戸時代に醸成されたからこそ、長らく言と文との不一致が普通であった日本において、明治の言文一致運動は起り得たのである（ひいては、種々のあの急激な欧化政策の推進は可能だったのである）。二葉亭が用いた白いゴマのような小さな句読点は、このようなオランダ語学習の流れの上に位置する、150年に及ぶこの充分なウォーミング・アップを承けて現れた成果のひとつである。彼我の論理的相違を理解するためになされた膨大な努力の、いわば証人なのである。

序章で取り上げた明治20年出版の『プロロン氏英吉利文典講義』には、その最終章 Prosody 「音律科」に Composition（編文法）が含まれている。その第7項は次のようなものである。

Original Composition (草案の起稿)

subjekt 即ち theme (標題) を選定し而して其当に思考論究すべき topics (局処) と篇中に使用すべき排置 (立案を云ふ) とを生徒に書き示して論述法を考究せよ

此練習は生徒の思想が topics を発見するに練習する迄施工せられざるべからず蓋し此練習は元來論理學上にて Invention (發明) と稱する所の者を馴致するの目的を以て設る者なり

此練習中にて教師は自ら心は是にて適当なりと判決する前に一応生徒に向ひて topics を草定する事を望まざるべからず

19世紀後半は、文法という概念それ自体が動揺をきたした時期であり、文法書によって扱われる範疇が異なる場合がある^{註26}。伝統的概念と新概念とが交錯する中、明治期に洋語学を志した者は、何を文法とするかということから悩まねばならなかったが、この時期に輸入された原書の英文典のなかでも、この Brownの文法書は、伝統に従って Prosody を持ち、しかも、この本自らがその第一課で明言している通り、言語を《正しく話し正しく書くの法を教える》のが文法である、とする立場に立って、《編文法》を Prosody の一環として取り扱っている。西欧では、論述法は文法であった。文法を学ぶということは、即ち、論理的な思考法を訓練することであった。このような「国語」(幕末・明治期の language の訳語)^{註27} の訓練を繰り返せば、確かに人は、テーマに添った論旨の展開に習熟し、段落の構成や、《；／、》等の性質・用法の相違にも目を開くであろう。日本で教えられる作文法が、専ら改行等の書き方の作法に終始してしまうのとは対照的である。日本の「国語」においても、解剖学風な文章読解はほどほどにして、このような文の構築法をこそ訓練すべきではないだろうか。特に、外国との対等な議論の必要性が叫ばれる現在、このことは、表面的な外国語の表現を切り売りする以上に大切なことのように思えるのである。

江戸時代にオランダ語学習を通じて日本人が学んだもの、そして、その豊かな精神的遺産を受け継いだ明治時代に、ヨーロッパ各国の言葉を通じて日本人が対峙したもの——それは、この緊密で重層的な西洋の論理であった。これが、二葉亭が《白抜き点》によって日本語に移そうとしたものであった。しかし、《白抜き点》は、『めぐりあひ』の改稿で早くも激減し、結局定着を見ずに終わってしまう。叙述の並列化という日本語の性質に抵触したからであるが、逆に言えば、句読点は、最も日本的な形で、即ち、意味連関という中身の抜けた単なる「切れ」の外的標識として、日本語の中に落ち着いた(と同時に「段落」の形成が阻まれた)のである。或いはこれも、外来のものを自らに合うようにたくみに変容させてきた「日本化」の一種と言えるのかもしれない。

「コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄て」ないために、『めぐりあひ』において二葉亭によって試みられた《白抜き点》は、このような、意味連関において重層的・立体的な西洋の論理と、物事を同列的・平面的に叙述する日本の論理との対決であったのである。

是れだ、是れよ違ひない、此聲だ……どうしてかど
いふどかうで。自分は家路を指して歸つた、海邊で
暫らく散歩してから。足疾や又街を過つた。夜には
もう先刻入つたので、——莊麗な夜に、南園の露西
亞のやうな静かで、物哀れな艶艶の舞人のやうな、總て氣
うして(三)？仕合せな妙齡の婦人のやうな、總て氣
味の佳い、さらびやかな、うつくしい。月は怪まれる
ほどに皎々と照りわたつてゐた。あざやかな大粒な
星は黒ずむた蒼空にさらつき切つてゐた。くろくろ
とした物の影は黄ばむまでに照らされた地面に劇然
際立ッて見えた。

「都の花」第一巻第一号に掲載された2.4の部分
(明治21年10月)

○注

1. 水野重太郎校閲、田中練太郎編纂『獨逸文法屈曲変化一覽表』南江堂、明治36より「例言」の冒頭部。国会図書館所蔵。
2. 宮口高敬『獨逸初学必携・全』文苑閣 出版年不明。全31葉の和綴本。その体裁および内容から明治初期のものとして推測される。8種の句読点はすべて原語で挙げられ、訳語は一切附されていない。国会図書館所蔵。
3. 明治33～34年の『言語学雑誌』諸巻は、標準語の制定、国字・字音仮名遣の改良、言文一致等に関する当時の社会的論調をよく伝えている。33年の第壹巻第弐号では「国語学界に於ける現時の問題」と題して、前島密がすでに《舊幕時代に於て屢々国字改良の建議を》したことから始めて、当時の新聞・雑誌に現れた社説等の題名をリストアップして掲載している(p.103ff.)。句読点に関しては、この雑誌所収の論文において句点未使用のものが見出される。
4. 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』V 早稲田大学出版部 昭和56, p. 31～70: 「蘭語学習における記号および句読法」
5. かと言って、句読法らしき試みが日本に全く無かったわけではない。これについては杉本つとむ「句読法の史的考察—江戸時代の文学作品を中心にして—」武蔵野大学紀要 VOL.2, 1967 参照。
6. 蘭学資料叢書5, 藤林普山『譯鏡 附蘭学選』青史社 1981所収、『蘭学選』十二・

十三葉。藤林普山の生没年は1780(天明1)～1855(天保7)。『譯鏡』出版は1810(文化7)年。《。》を現在の読点の様に用いている。

7. だが二葉亭が最初ではない。「山田美妙が明治十九年五月、手写本「我楽多文庫」八の巻で使用したのが「、」記号の初出だとされている。…」(日本近代文学体系4『二葉亭四迷集』補注123,角川書店、昭和46)[筆者注:「、」は「。」の誤り]

8. 各用語の出典は以下の通りである。

《句読点》⇒織田純一郎先生校閲・長野一枝先生講義『プロロン氏英吉利文典講義』吉岡氏蔵版、明治19～20(1886～7)。清水誠吾著『イングリッシュ文法主眼』(大阪・貳書房出版、明治20(1887))では《句読》。

《句読点》⇒大学南校助教譯『格賢勃斯英文典直譯』大学南校開版 明治3(1970)。蘆田東雄譯『スウキントン氏英文典直譯』(合書堂、明治20(1887))にも《句読》とある。句読法を、文を「分かつ」のではなく「続ける」法だとする理解には興味を引かれる。

《附点法》⇒斎藤秀三郎譯『スウキントン氏英語学新式直譯』十字屋錠太郎・日進堂、明治17(1884)

《點書法》⇒平井廣五郎譯述『須因頓氏大文典講義』西京・文港堂、明治22(1889)

《句點》⇒中村秀穂譯『ソメル氏佛文典獨学』同盟出版、明治20(1887)

なお、ドイツ語系の名称はこれらとは異なっている。

《點記》⇒注2参照。

《附標》⇒高橋金一郎著『獨逸文典』獨逸語学校蔵版、明治28(1895)

《符号》⇒崎山元吉著『獨逸学捷徑』全 崎山蔵梓、明治24(1891)。この人には英文法書もあるが、同じく《符号》という用語を用いている。英・独ともに句読記号の訳名は一切附されていない。

これらドイツ語系の訳語は江戸時代のオランダ語(低地ドイツ語)学のそれを継承しているように思われる。即ち《點記》は前野良沢の《点例》を、《附標》《符号》は藤林普山の《標識》を彷彿とさせるのである。その意味を訳出している英・仏系に比べ、ドイツ語はそっけない直訳の傾向がある。文典はいずれも国会図書館所蔵。

9. 『格賢勃斯英文典直訳』(一文の終わりが行末に来たときだけ《L》を用いている。これについては注5参照)、『プロロン氏英吉利文典講義』後編、『獨逸文典』文論⇒注8参照。

10. ⇒注4書、p.37

11. 清水護編『英文法辞典』(第5版)培風館 昭和52

12. 『イングリッシュ文法主眼』(⇒注8)p.149～154

13. 『ソメル氏佛文典獨学』(⇒注8)p.207～218

14. 句読点について、この英・仏文典でもうひとつ興味深いのが、《朗読ノ際節ノ長短音声ノ抑揚ヲ示ス》(『イングリッシュ文法主眼』)、《呼吸ノ必要ニ依テ請求サレタル休止》(『ソメル氏』)という、朗読法に関係した記述である。特に前者には次のような注意書きが附されている。

「カムマ」ノ後ニテ「一ツ」「セミコロン」ノ後ニテ「一ツニツ」「コロン」ノ後ニテ「一ツニツ三ツ」「ピリオド」ノ後ニテ「一ツニツ三ツ四ツ」ト言得ル丈ノ時間ヲ息ミ然ル後次ノ文章ニ読移ルヲ通例トス。

同様の記述が蘭文典にも見られる。前野良沢には、コンマについて《按一本ニ云此点ヲ記シテ區別ヲナシ以テ誦読ノ氣息ヲ節ニス(註、解取付)此「テケン」(雜註：「格」のオラシ語)有片読者氣息ヲ休ムベシ)、セミコロンについて《此「テケン」有片ハ氣息テ上ノ「テケン」ヨリ休止する「稍久シクスルナリ」(⇒注4書p.37)とあり、宇田川榕庵も《点ハ…然レ片コレハ生人ノ靈妙ナル処カラ言語ノ内ニ津唾を飲ムノ間アリ氣息ノ緩急アリ声ノ抑揚アリ音ノ悲喜アリ眼口ニ笑態アリ額ニ八字アル等ニ因テ点ニ代ルナリ》(⇒注4書第Ⅱ巻 p.905)と記している。

この朗読の妙については、二葉亭自身も『余が翻訳の標準』冒頭で言及している。

…一体、欧文はただ読むと何でも無いが、よく味おうて見ると、自ら一種の音調があって、声を出して読むと抑揚が整うている。すなわち音楽的である。…これは確かに欧文の一特質である。

ところが、日本の文章にはこの調子がない。一体にだだらして、黙読するには差しつかえないが、声を出して読むとすこぶる単調だ。ただに抑揚などが明らかでないのみか、元来読み方ができていないのだから、声を出して読むには不適當である。…

この「音楽的音調」を整えるのが句読点であるからこそ、二葉亭はコンマやピリオドに至るまで配慮を怠らなかったのである。この句読点と朗読法の関連は、恐らく伝統的に「中世の文典ではProsodia(アクセント、音調などに関する学問)が、文法の精華と見られてい」(渡部昇一『英文法史』研究社、昭和40 p.17)たためであろうが、いずれにせよ、音読が衰退し黙読が主流の現代ではなされない句読点の説明である。

しかし、これは、先に言及した明治期の英・独文典にこそなかったが、『めぐりあひ』翻訳当時の他の洋語文典ではしばしば見出すことのできる説明なのである。ところが、句読点に関する次のような彼我的意識的ずれに遭遇すると、日本はやはり、文字偏重・訳読優位の国だったのかと思わざるを得ない。

Punctuation is the art of dividing composition, by points or stops, for the purpose of showing more clearly the sense and relation of the words, and of noting the different pause and inflections required in reading.

句読法は各語之意味及説を指示する「之」目的ニ向テ句點或句切ニ因テ完章ヲ分別スル「之」術デ有而シテ読書スルニ要セラレタル種々ノ句標及文法ノ屈曲ヲ記スル「之」法也 (外川秀次郎編纂『英学五書獨案内』大阪同志出版舎蔵版、明治18)

ここでは《pause》は、声の「休止」ではなく、訳読に必要な「句標」なのである。

15. 馬島珪之助譯『挿譯注釈セーフエル氏獨逸文典』一名実用獨案内(前・後編) 伊藤誠之堂、明治19(1886)。この書自身は句読法に関する説明を持たない。
16. 斎藤秀三郎譯『スウヤントン氏英語学新式直譯』⇒注8参照。
17. 〈い〉のみ使用のものは、他に、中西範譯『ブラウン氏英文典直譯』開新堂・三省堂、

明治17(1884)、『須因頓氏大文典講義』(⇒注8)、平山直道譯『ソンメール氏佛文典直譯』丸善商社書店、明治20(1887)〔ただし「緒言」の日本語には一箇所を除いて〈・〉の使用なし〕等がある。

本論冒頭に掲げた藤林普山のように、〈・〉だけなのは崎山元吉の『獨逸学捷徑』(⇒注8)である。〈・〉が文末の他に(ただし〈・〉のない場合も多々ある)、「冠詞。名詞。代名詞(単数)ノ諸格(カ。ノ。ニ。ヲ)ニ応スル語尾ノ変化及ビ…」のように用いられている。

一方、同じ崎山元吉の、これより2年後の明治26(1893)年に書かれた『英語教授書』(崎山蔵梓)では、本文中で使われている〈符号〉は主に〈・〉で、邦訳された例文・単語末、および解説文の段落末に打たれている。ただし段落中の文末には〈・〉がある場合とない場合とがある。また独文典同様、時に〈・〉も句点として用いられている(崎山元吉は、明治4年6月、紀州藩よりドイツに留学したことが、丸山國雄『日獨交通資料』第三輯(日獨文化協会、昭和11、p.16)に見える)。

さらに〈・〉と〈ゝ〉の用法が現在と逆転している例が、海軍兵学寮出版の『英学新式』(巻一)〔正確な刊年不明。恐らく明治の最初期〕に見られる。しかもここには、文頭を一字下げる「段落」が存在している。

18. 『二葉亭四迷・嵯峨の屋おむろ集』(明治文学全集17)筑摩書房 昭和46、p.108
19. ロシア語文法では、「一定の方向を持つ進行中の単一過程」を表す動詞を「定動詞」と呼ぶが、ここで言うところのものはそうではなく、現在ドイツ語文法で用いられている、「人称・数・時制・法によって決定された動詞の活用形」の意味での「定動詞」である。
20. 他に〈ゝ〉を用いた例は、例えば巖谷小波があり、明治22年8月『妹背貝』(翻訳ではなく創作小説)の「読者心得」第四条には、

此の小説は、句読無くして読めるものに非ず、乃ちゝゝゝ三通りの句点を設けたり。一生懸命之に便る可き事。

とある(引用は筑摩書房の現代日本文学全集84『明治小説集』より)。杉本つとむ氏は「句読点記号の用法と近代文学」の中で、この〈ゝ〉について、「ゝゝゝゝゝの用法をみると文章・文・語句(語・文節・句)の違いによる使用別も意識されていたように思われる。ゝに限っては、後の美妙の場合を考慮に入れると一種の感情・感興の^{とどめ}に施した点も考えられる」と注釈されている。

21. ⇒注4書、p.31
22. ⇒同上書、p.67
23. 《…柳圃のもとで勉強した玄幹が、柳圃の人と学についてつぎのようにのべているところも参考になろう。

抑も惟ルニ先生ノ人トナリ篤行謹慎西学に長スルノミナラス、兼テ国学漢学ヲ既知スルコト恐クハ古今ノ訳家其右ニ出ル者ナケン)

(杉本つとむ『国語学と蘭語学』武蔵野書院 1991、p.20)

24. ⇒注4書第1巻、p.903

25. ⇒同上書、p. 904

26. 中世以来の文法の四部門（Orthographie, Etymologie, Syntax, Prosodie）については、渡辺昇一『英文法史』（⇒注14）p. 16f. を参照。この文法の四部門の動揺に関しては、明治31年の英文典に次のような記述が見られる。

夫レ上述ノ如ク従来ハ Grammarヲ分類ノOrthography, Etymology, Syntax及ビProsodyノ四トシ此ノ區別ニ従ヒテ英文法ハ口述セラレタリシモ各学者間各々其観ル処ヲ異ニ為シ即チ Brown氏Quackenbos氏其他諸氏ハ此ノ四科ノ區別ニ従ヒ講述セラレタリト雖モ近来ノ学者ハ大ニ其見ル処ヲ異ニ為シ Swinton氏Bain氏Nesfield氏等ハ前述ノ法ヲ採ラズ Swinton氏ノ如キハ四科ニ區別スルノ大ニ非ナルヲ説キ Orthographyハ字書及ビ綴字書ノ当ニ關係スベキモノト為シ又タ ProsodyハRhetoric修辭学ノ当ニ論ズベキモノニシテ Grammarヲ正當ニ嚴格ニ解釈スル片ハ Etymology及ビSyntaxノミニ就キ論ズベキモノト立論シタリ……余ハ理論上ヨリ云フ片ハ Swinton氏ノ區別法ニ従ハザル可ラズ然レモ現今学生ガ Grammarヲ研究スル上ニ就キテ便宜如何ト云フ問題ニ移ル片ハ大ニ Swinton氏ト其観ル処ヲ異ニ為スモノト為ス…

（井上歌郎著『新式実用英文典講義』後掲閣）

27. 「国語（クニゴバ）」は、現在は日本語のみを指すが、幕末～明治期においては「言語」の意味の訳語であった。例えば、

- ① 辞ガ／夫<是>ハ／一ノ文章<^{クニゴバ}國語>之組立ヲ／為ス所ノ辞ガ…（安政期頃）
- ② 国語ノ最モ単ナル元^基ハ何^ノデアルカ（明治3）
- ③ 国語ハ話サレタル又ハ書カレタル語ノ方便^ノニ依テ思想ノ言顯デアル（明治17）
- ④ 国語ノ最單ナル元素ハ如何ナルモノナルヤ（明治17）
- ⑤ ソコニ英吉利国語ニ於テ多クノ辞ガアル（明治19）
- ⑥ 文典ハ国語ノ学デアル（明治20）

出典は、①訳者未詳『和蘭文典前編直訳』第二十五章（⇒注4書第Ⅱ巻、p. 1211）②『格賢勃斯』第六ノ課（⇒注8）③『スウキントン氏英語学新式直譯』導引ノ課（⇒注8）④垣上緑挿譯『英国文典獨案内』第六ノ課 嚙山書房蔵版⑤萩原孫三郎譯『ピチヲ氏英文典獨案内』第一章 神戸甲子二郎発刊⑥『ソンメル氏』第一編（⇒注8）。なおドイツ語では、注15書を含む4種のシェーフェル文典直訳を調査したが、いずれも「国語」Sprache に関する説明を持たないため用例なし。①以外は国会図書館所蔵。

○使用した原典

1. 初稿：『都の花』第一巻第一号「めぐりあひ」第一 明治21年10月（復刻版『都の花』第一巻 不二出版 1984 所収）
2. 改稿：『二葉亭全集』第二 池田吉太郎編 東京朝日新聞発行所 明治44
3. 原典：Тургенев, И. С., Полное собрание сочинений и писем в двадцати восьми томах-сочинения V (1844-1854). Москва-Ленинград, 1963

○参考文献

1. 日本近代文学全集4『二葉亭四迷集』田中保隆(解説)／畑 有三・安井亮平(注釈)
角川書店 昭和46
2. 現代日本文学全集1『坪内逍遙・二葉亭四迷集』筑摩書房 昭和30
3. 同84『明治小説集』(巖谷小波『妹背貝』収録)
4. 日本現代文学全集4『坪内逍遙・二葉亭四迷集』講談社 昭和37
5. 明治文学全集17『二葉亭四迷・嵯峨の屋おむろ集』筑摩書房 昭和46
6. 水野 清「『浮雲』『あひびき』『めぐりあひ』——地の文における文末語について」
『言語生活』筑摩書房 昭和33.5
7. 神西 清「二葉亭の翻訳態度」全集編集部編『二葉亭案内』(新書型全集別巻)岩波
書店 昭和29.6
8. 中村三夫「口語文と外国文学」『文学』vol.20 岩波書店 昭和27.12
9. 大谷 深「ロシア文学の翻訳と日本文学」『国文学』学燈社 昭和34.3
10. 柳田 泉「明治初期の翻訳文学」『明治初期翻訳文学の研究』春秋社 昭和36.9
11. 關 良一「二葉亭四迷の翻訳文学」同上
12. 杉本つとむ「句読法の史的考察—江戸時代の文学作品を中心に—」武蔵野大学紀要
vol.2, 1967
13. 杉本つとむ「句読点記号の用法と近代文学」『国文学研究』35, 昭和42
14. 原田敬一『英語句読法の知識と使い方』南雲堂 1985
15. 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』八坂書房 1985
16. 惣郷正明『日本英学のあけぼの』創拓社 1990
17. 『日本英学資料解題』大阪女子大学 1962
18. 『日本の英学100年』明治編 研究社 1968
19. 丸山國雄『日獨交通資料』第三輯 日獨文化協会 昭和11
20. 宮永 孝『日獨文化人物交流史』三修社 1993
21. 『言語学雑誌』富山房 明治33~34年の諸巻
22. 茂住実男『洋語教授法史研究』学文社 1989
23. 金井 圓『近世日本とオランダ』日本放送出版協会 1993
24. 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』I~V 早稲田大学出版部 昭和56
25. 杉本つとむ『国語学と蘭語学』武蔵野書院 1991
26. 杉本つとむ『長崎通詞ものがたり』創拓社 1990
27. 杉田玄白著／緒方富雄校註『蘭学事始』岩波文庫 1991
28. 福沢諭吉著／土橋俊一校訂・校註『福翁自伝』講談社文庫 昭和54
29. 中山緑朗「近世以前の動詞研究の歴史—活用表の成立と展開を中心に—」『研究資料
日本文法』第2巻 明治書院 昭和59
30. 渡辺昇一『英文法史』研究社 昭和41
31. 清水護編『英文法辞典』(第5版)培風館 昭和52

○使用した明治時代の洋語文典

1. 慶應義塾読本『ピテヲ氏原板英文典』尚古堂 明治2(1869) [中味は英文]
2. 大学南校助教譯『格賢勃斯英文典直譯』大学南校開版 明治3(1870)
3. 『英学新式』海軍兵学寮 刊年不明
4. 中西 範譯『ブラウン氏英文典直譯』開新堂・三省堂、明治17(1884)
5. 斎藤秀三郎譯『スウキントン氏英語学新式直譯』十字屋錠太郎・日進堂、明治17
6. 垣上 緑挿譯『英国文典獨案内』嘯山書房蔵版、明治17(1884) (1884)
7. 外川秀次郎編纂『英学五書獨案内』大阪同志出版舎蔵版、明治18(1885)
8. 萩原孫三郎譯『ピテヲ氏英文典獨案内』神戸甲子二郎発刊、明治19(1886)
9. 織田純一郎先生校閲・長野一枝先生講義『プロロン氏英吉利文典講義』吉岡氏蔵版、明治19~20(1886~7)
10. 清水誠吾著『イングリッシ文法主眼』大阪・貳書房出版、明治20(1887)
11. 蘆田東雄譯『スウキントン氏英文典直譯』合書堂、明治20(1887))
12. 平井廣五郎譯述『須因頓氏大文典講義』西京・文港堂、明治22(1889)
13. 崎山元吉『英語教授書』崎山蔵梓、明治26(1893)
14. 井上敬郎著『新式実用英文典講義』後淵閣、明治31(1898)
15. 平山直道譯『ソンメル氏佛文典直譯』丸善商社書店、明治20(1887)
16. 中村秀穂譯『ソンメル氏佛文典獨学』同盟出版、明治20(1887)
17. 宮口高敬著『獨逸初学必携』全 文苑閣、出版年不明
18. 崎山元吉著『獨逸学捷徑』全 崎山蔵梓、明治24(1891)
19. 馬島珪之助譯『挿譯注釈セーフエル氏獨逸文典』一名実用獨案内(前・後編) 伊藤誠之堂、明治19(1886)
20. 高橋金一郎著『獨逸文典』獨逸語学校蔵版、明治28(1895)
21. 水野重太郎校閲・田中練太郎編纂『獨逸文法屈曲変化一覽表』南江堂、明治36
22. Quackenbos, G.P., First book in English grammar. New York, 1867
23. Schäfer, E., Leitfaden beim Unterrichts in der deutschen Sprache für die unteren Klassen höherer Lehranstalten. Tokio, 1882
24. Maatschappij, Rudimenta en Syntaxis. Te Leiden en Deventer, 1819, 1846